
僕が僕への反抗を止めた日

unbelievable_kazoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が僕への反抗を止めた日

【コード】

N3089T

【作者名】

unbelievable_kazoo

【あらすじ】

僕（主人公）が駅前で経験したことから、その翌日のことです。少し重ったるい話です。

駅の改札を抜けたら、駅前の広場に二台のパトカーが停まっているのが見えたんだ。それと野次馬がいた。空は夕焼けが綺麗だった。ラーメン屋の前に人がたくさん集まっていた。ちょうどパトカーがここに着いたばかりだったらしくて、二人の警官が入口前を囲むように群がっていた野次馬をかき分けながら（まるでモーゼのようだった）ラーメン屋に入ってしまった。

ラーメン屋の入口のドアが開くと罵声が聞こえた。男の声だとは分からなかった。男はどうやらラーメン屋で暴れていたらしくて何か言っているのだけど意味は分からなかった。

やがてパトカーの中で待機していた警官もラーメン屋の中に入ってしまった。僕は野次馬に混じることはせずにパトカーの近くでその様子を眺めようとした。野次馬たちもつまらないことだと悟ったのか、それとも自分の身に危険が及ばないように避難をしたのだろうか、それは分からないけど一人去るとまた一人去って行き、暴れていた男がラーメン屋から連れだされて来た時にはもうほとんどいなくなっていた。

そこでラーメン屋の入口が始めて見えたのといっしょに、警官と一人の男がラーメン屋から出てきた。男はなにか怒声を上げてたけど、警官がしつかりと押さえているせいか暴れはしなかった。

男はラーメン屋の入口前で警官を怒鳴りつけると、今度は店の中に向かって世界を震えさせるほどの声をだした。ウソじゃない、だつて歩いてきた人の足を一瞬止めたし、僕だつて少し震えたんだから。

男はまた変な奇声を上げながら、やつと僕にも分かるような意味の言葉を発し始めた。「俺はもう死ぬんだ」という声も聞こえたし「誰もが俺を馬鹿にする」という声も聞こえたし「お前らも滅んじまえ」とか、「俺はどうせ異常なんだよ」とかという言葉も叫んでい

た。誰に向かつて叫んだのか分からないその言葉は駅前の方の隅
つこまで響き渡ったんだ。

すると、ラーメン屋の二軒隣りにあったおでん屋からおっちゃん
が出てきた。決して身なりが綺麗とはいえない、みすぼらしくて道
端で寝ているんじゃないかと思わせるような姿のおっちゃんだった。
おっちゃんはその男にすぐに気がついて、そいつの方を向いた。

男が「見んなよ、殺すぞ！」って言ったらおっちゃんが「うるせえ
！」って言い返した。

警察はその小汚いおっちゃんに近付こうとしなかった。というよ
り、皆でそのおっちゃんを黙らせる権利を譲り合っているようにも
見えた。

「飲むぞ！ 馬鹿野郎！」

おっちゃんが男に向かつてそう叫んだんだ。男と比べると大きな
声ではなかった。けど、道行く人の足を止めたんだ。僕もびっくり
した。

男がそれを聞くと、また意味の分からない声を叫んで、金切り声
っていうのかな、そんな奇声を出したんだ。なんか、その男は泣き
そうにも見えた。

突然、ラーメン屋の中から一人の男が出てきた。給食で使われる
鍋よりも大きな鍋を両手で持って出てきたかと思うと、いきなり奇
声を上げていた男に鍋の中身をぶっかけたんだ。「死んじまえ！」
って叫びながら熱湯を背中から男に勢いよくぶっかけた。

熱湯を浴びた男は今まで聞いた中で一番の大きな声を出してその
辺を飛び跳ねた。悲鳴のような声を上げて「あちい」という声がか
ろうじて聞きとれたら、それは警官が叫んだ言葉だった。男はただ
叫ぶだけで、すぐに鍋を持っている男が警官に捕らえられた。

捕えられた男は「ざまあみる」という声といっしょに笑っていた。
大きな笑いはやがて収まっていつて、笑みを残したままパトカーの
中に連れ込まれて行った。

熱湯を浴びた男は「熱い、熱い」と呻きながら地べたに転がって

いた。

小汚いおっちゃんはそのを見て大笑いを続けていた。「だらしねえな、酒を飲むぞ！」って言って、右手を天高く振りかざすと、また空に向かって大笑いをし始めた。

野次馬のほとんどが携帯電話でその光景を写そうとしていた。子連れのお母さんたちは片方の手で口を押さえながら。もう片方の手で転がる男を見ようとする子どもの手を引っ張ってさっさとどっかに行ってしまった。

熱湯がかかった警官は「あっちい」と言ったりして。その辺を行ったり来たりしてうるつき始めた。

僕は、その様子を黙って見ていた。ただ黙って見ていたんだ。あまりにも滑稽なその光景を、僕は笑いを堪えながら目立たないようにただ黙って見ていたんだ。

やがて救急車がやって来て、熱湯を浴びせられた男がタンカーに運ばれて救急車の中へ入っていった。その時になると、さっきまでいたほとんどの野次馬がもういなくなっていて、いたのはここで何があったのかを知らない、さっき来たばかりの新たな野次馬たちだった。

救急車が去って行くと、それと一緒にパトカーも去って行って、いつもの静かな駅前広場が戻った。夕焼けが綺麗で、ほとんどの人が足を止めることなく広場から去って行くいつもの様子が戻って来た。

僕も歩き始めた。行き先も帰る先もないけれど。とりあえず寝床を探そうと思って歩いて、いつの間にか日も沈んでいて、そこで結局マンガ喫茶で一夜を過ごすことにした。

翌朝、僕がホームレスになってちょうど二カ月経って、久しぶりに新聞を買った。昨日の駅前の広場であったことが掲載されていないかを確かめたくて朝飯を我慢して買った。

全国紙には載っていなかったけど、地方紙には載っていた。とは言っても小さな記事として取り上げられただけで、たいしたことが書かれていなかった。

書かれていたことは『ラーメン屋で乱闘』という見出しで始まっていて、ラーメン屋の店主と暴れ狂った男性客が逮捕されたということと、男性客の暴れた理由が『煮卵が入っていなかった』ということ、警官にお客が連れ出された後に店主が鍋一杯の熱湯をお客にぶっかけたという、たったそれだけのことしか書かれていなかった。

僕はここにさらに三つのことを書き足したかった。

一つは熱湯をぶっかけられた男の叫び声もう可笑しかったこと。僕の目の前で叫んだ男の言葉があまりにも可笑しくて、僕は腹の底から笑いそうになったこと。

でも、これで笑えた人は幸せなんだなと思った。だから、あの小汚いおっちゃんは僕より幸せなんだろうって思った。

二つ目は携帯電話でその光景を撮っている人たちの何人かがスリにあっていたこと。カバンの中から財布を抜き取られる様子が僕は知っている。どうして誰も気がつかなかったのだろうか。あんなに堂々と掏られていたのに。

三つ目は、あの小汚いおっちゃんが僕よりずっと金持ちで、ホームレスの中で裕福な男だと知られていること。『おっちゃん』と呼ばれているその若い男がどうしてホームレスになったのか、そんなことは僕は知らないけど、ついでに言うかどうかどうして小汚い格好をしてそのおでん屋にいたのかさえ僕は知らないけど、その『おっちゃん』があの光景を見て腹の底から笑っていたことが、僕にとって一番羨ましかった。

けれども、やっと『おっちゃん』がどうして金持ちになれたのがこれで分かった気がした。『おっちゃん』は人の心が分かるのだらう、きっと。

昼前に『おっちゃん』が住んでいる河川敷の段ボールハウスに僕は行った。『おっちゃん』がそのハウスの中から出てきた。昨日とは違う、身なりが整った綺麗な姿だった。

「はい、ごくろうさん」と言つて『おっちゃん』は僕に三万円をくれた。

「いいんですか？ 僕は見ていただけなんですけど」と僕は言った。だつて確かにその通りなんだから。でも、これは『おっちゃん』に指示されてやったことだつた。

「いいんだよ」と『おっちゃん』が言つて、ハウスに戻ろうとした。「昨日の事件も『おっちゃん』が考えたことなんですか？」と僕は聞いた。

「ん、あれは偶然だよ。でも、それでも仕事をしないと他が動けないからなあ」

「本当はどういう作戦だつたんですか？ 僕は何も聞かされていなかったんです」

「ん、聞かせるつもりもなかったからなあ。そりゃ、そうだよ。」

まあいいや、教えてやるか。俺が激しく笑う。ほとんどの人が俺を見て避けるように去って行くが、中には親切な奴が近づいてくる。一人近付くと、もう二三人近づいてくるもんで、警察を呼ぼうとする奴が出てくる。そして俺の仲間が二三人近づいてくる。そして財布を掏る。それで終わりだ」

「僕は本当に見ているだけなんですな」

「そうだ。分かつたらさつさと帰れ。それともうこの仕事は店じまいだ。俺もここから消える。じゃあな」

そう言つて『おっちゃん』は中に入って行つた。腑に落ちないことがいくともあつただけで、僕もさつさとそこから去って行つた。

駅前のラーメン屋は休業になっていた。当たり前だな、と僕は思った。

何を食べようか考えながら歩いていたら、後ろから声を掛けられ

た。振り向くとそこには警官がいた。ぼくは何だろうと、少しびつくりした。

警官の言うことに逆らえなかった僕は、すんなりと財布の中から保険証を見せた。保険証を見た警官は僕にそれを返さずに、いくつが質問をしてきた。

「昨日のことをご存知ですか？」

「はい」

「昨日、ここで何件かの盗難があったのですが、知っていましたか？」

「いいえ」 動揺を隠しながらも僕はそう答えた。『おっちゃん』

との約束では、誰にも口外しないということだったから。

「そうですか。怪しい人は見ませんでしたか？」

「いいえ」

「ありがとうございます」と警官は言って、振り返って僕に背を向けた。僕はさっさと警官から離れたくて、さっさと歩きだそうとした。

「着いて来てくれますか？」

警官が僕にそう言った。僕は頭が真っ白になった。スリの協力をしていたのがばれたのではないかと思っただ。

逃げ出したかったけど、僕はすんなりとその警官に着いて行った。警官に逆らえる気がしなかったんだ。

連れていかれた場所は人気のない静かな駐車場だった。どうしてこんなところに連れてこられたのかが不思議だった。

警官が言った。「お前は馬鹿だな」って。

やがて一台の白いワゴン車がやって来るのが見えた。ワゴン車が僕と警官の近くまでやって来て停車した。停車すると、ドアが開いて中から『おっちゃん』が出てきた。

そのときになってこの警官が偽物だと僕は気がついたんだ。僕は馬鹿だな、と思った。

「で、どうだった」『おっちゃん』が偽警官に言った。

「いや、本当に何もしゃべらなかつた」偽警官がそう答えた。

「そうか」とだけ『おっちゃん』は言つて、そして僕の方を向いた。「とりあえず三万円を返せ。お前にはその三万円は必要ないだろ」いやだ、と言いたかつたけど偽警官が僕の保険証をちらちらと見せつけて、ライターで炙り始めようした。それを失くしたら困る僕は、渋々三万円を『おっちゃん』に返した。

『おっちゃん』は偽警官に保険証を僕に返すように言つた。偽警官はさつさと僕に保険証を返してくれた。

『おっちゃん』が車に乗り込むと偽警官も車に乗り込んだ。

「さつさと家に帰れ」と偽警官が僕に言つた。「帰る家なんてない」と言つたら二人とも笑つて「探せ、馬鹿」と言つた。

車のエンジンがかかり、僕はそれを呆然と見ているしかなかつた。助手席に座っていた偽警官が窓を開けて笑いながらこう言つた。

「おい、良かったな、生きていられて」

「知るか」つて言い返してやつた。言い返したつもりだつた。車はそのままどこかへ行つてしまつた。

僕はそこに立ちすくんでいた。上を向くと天高くある太陽が眩しかつた。ついでに青空が綺麗だつた。

どうしよう。もう有り金は尽きてしまつた。金が欲しくても働けない。一人で勝手に働ける年齢じゃない。財布に金が無かつたら何もできない。

けれど家にも戻りたくない。やつと見つけた仲間にも裏切られた。どうしよう、どうしよう、と思いながら僕は駐車場から離れて、そして駅前に向かつた。

駅前に着いた僕は、何をしていいのか分からなかつた。ぐるりと周囲を見回した。いつもと変わらない、日常つて言うのかな、そんな風景が見られた。

ただ、ラーメン屋が休業になつていた。当たり前だな、つて僕は思つた。

ラーメン屋の入口のシャッターに一枚の紙が貼られていた。

玉子をいつもケチるからそうだったんだ！ ばーか！

僕はそれを見て笑いが堪えられなくなつて、腹の底から大きな声で笑つたんだ。笑つてやつたんだ。ずっと笑つていたんだ。すると数人ぐらいが足を止めて僕の方を見て来たんだ。

パトカーがやって来て、やがてパトカーから出てきた警官が僕のところに行って来たんだ。僕はそいつらに「本物か？」って言うてやつたんだ。

あいつら卑怯だから質問に答えなくて、僕のことをさつさとパトカーの中に連れて行つたんだ。そして、僕はパトカーと共にあの駅前広場から消えて行つたんだ。

パトカーの中で警官に聞いたんだ。「正しいって何？」聞いてみたんだ。

でも、あいつらはやっぱり卑怯だから答えもしないでそのまま僕を警察署まで連れて行つたんだ。何でか知らないけど、警察署の連中はみんな可哀そうな目つきで僕のことを見ていたよ。

分かつてるよ。正しいなんて、もうどこにもないんだ。真実だなんて単なる思い込みにすぎないんだ。

だから、そのことを再認識するきっかけになつたあの事件を僕はいつまでも覚えておくことにするよ。それが、いまの僕の正しいことだと思つたんだ。

警察署でどうして僕がホームレスになつたかを言つたらみんな呆れていたよ。「単なる家出じゃねえか」っていう声も聞こえたよ。

もう、それでいいよ。嫌でも帰るよ、家に。それが正しいんだろ、世間では。だったら、帰るさ。帰つて、また、何をすればいいのかわからないけど、静かに暮らそう。そうするよ。反抗期つていふのかな、僕のそれはもうこれで終わりにするよ。

(後書き)

ご拝読、ありがとうございました。

初めて重ったるい小説に挑戦してみたのですが、いかがでしたでしょうか？

では、ここまで読んで下さりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3089t/>

僕が僕への反抗を止めた日

2011年5月16日00時28分発行